The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マッフェオ・ヴェージョSupplementumにおける『アエネイス』との接続
Author(s)	小川, みなみ
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2021, 55, p. 81-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91488
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マッフェオ・ヴェージョ*Supplementum*における『アエネイス』との接続

小川　みなみ

キーワード：ヴェージョ／*Supplementum*／アエネイス／ネオラテン

はじめに

Libri XII Aeneidos Supplementum（『アエネイス 12 巻に対する補遺』以下 *Supplementum* と表記）は、15 世紀前半から中葉にかけて活動したイタリアの詩人マッフェオ・ヴェージョ（伊：Maffeo Vegio 羅：Maphaeus Vegius）によって 1428 年に発表された 630 行のラテン語叙事詩である。本作は古代ローマの代表的叙事詩人ウェルギリウスによる全 12 巻の叙事詩『アエネイス』の補遺として書かれた作品であり、「アエネイスの第 13 巻」という別名で呼ばれることもある。[1)]

Supplementum は、『アエネイス』第 12 巻の最後の場面、アエネアスがトゥルヌスを刺し殺した直後から始まる。内容は大まかに前後半に分けられ、前半では停戦や弔いの様子、後半では和解やアエネアスのラウィニアとの婚姻や神格化を描いている。

『アエネイス』は同時代の作家たちのみならず、遠く後世の作家に影響を与え、また批評家の話題になる作品である。ヴェージョの生きた時代にも、ウェルギリウス及び『アエネイス』は内容においても修辞表現においても一定の評価を受けてきた。[2)] ヴェージョもまた自身の著作においてウェルギリウスの卓越性を認めている。[3)] このような時代において、*Supplementum* は一定の評価を得た。14 世紀から 16 世紀初めまで広く流通し、1471 年には

Adam de Ambergau 版『アエネイス』を皮切りに 15 世紀には他の様々な版に『アエネイス』と合わせて収録された。[4)]

本稿[5)] の目的は、このように『アエネイス』の続きを謳い、『アエネイス』と共に本に収められるほどに受け入られた *Supplementum* がどのような方略で以てその原作たる『アエネイス』と接続されているのか、及び、その接続において生じている矛盾点からヴェージョが『アエネイス』をどのように理解し、どのような意識で *Supplementum* を書いたのかに関して、一定の説明を与えることである。

第 1 節では、*Supplementum* のあらすじを概観し、『アエネイス』との時系列的な関係を確認する。

第 2 節では、両作品の本文から、*Supplementum* の冒頭部、及び『アエネイス』中にしばしば発される予言を手掛かりにして、どのようにヴェージョが *Supplementum* を第十三巻として『アエネイス』に接続しているのかを確認する。

第 3 節では、前節で見たところの冒頭部、及び予言による『アエネイス』との結び付きにどのような矛盾があるかを指摘する。

第 4 節では、指摘した不自然な点、問題点に関して、作品内外からの説明を試みる。

本論

1. *Supplementum* あらすじ

Supplementum の内容を説明する前に、まず前提となる『アエネイス』の概要を説明する。

『アエネイス（羅：*Aeneis*）』は古代ローマの詩人ウェルギリウス（羅：Publius Vergilius Maro, 70-19B.C.）による 12 巻からなるラテン語叙事詩である。トロイア戦争から落ち延びた英雄アエネアスが、イタリアへ渡り国を建

てたという伝説を基にして、ローマ建国の歴史伝承を扱った国民的叙事詩である。[6] 前半6巻は主にイタリアへ向かう放浪を、後半6巻はイタリア到着後のイタリア人たちとの戦争を描いている。*Supplementum* に直接関連してくる後半部では、ラウレントゥムの王ラティヌスの娘ラウィニアとの結婚を巡って、神々の介入をはさみながら、トゥルヌスが大将を勤めるイタリア人たちとアエネアスたちの戦争が行われる。最終巻である12巻では、アエネアスとトゥルヌスの一騎打ちによって戦争の決着がつく。アエネアスは助命を求めるトゥルヌスに一度は心を動かされるが、彼の身に着けていた剣帯を見て怒りを再燃させ、トゥルヌスを刺し殺す。この剣帯は第10巻でトゥルヌスがパラス[7] を殺し、彼から戦利品として得たものであった。トゥルヌスの魂が冥界へ飛び去るところで詩は終わる。

Supplementum は、この直後からの内容をあたかも『アエネイス』から続いているかのように書いた作品である。詩に序歌はなく、トゥルヌスの死体と側で立っているアエネアスの描写から始まる。総大将の死を目の当たりにしたルトゥリ人たちは降伏し、アエネアスはそれを受け入れる。アエネアス率いるトロイア軍は陣営に戻り神々に犠牲をささげ、戦争が終わったことを喜ぶ。一方でルトゥリ人たちはトゥルヌスの遺体を運び、ラティヌスやトゥルヌスの父であるダウヌスはその死体に嘆きの言葉をかける。都市アルデアは焼け落ちる。

翌日、ラティヌスはアエネアスへ使節を送り、彼をラウレントゥムに迎える準備をする。ドランケスを初めとする使者の求めに応じたアエネアスはさらに次の日に、ラウレントゥムへ入城する。群衆がその到着に声を上げる中、ラティヌスとアエネアスは婚姻と盟約に同意し、祝賀がなされる。

その後、アエネアスが自身の都市の建設を始めたところ、妻ラウィニアの髪に炎が灯るという異兆が起こる。そこに女神ウェヌスが現れ、今後来たる栄光について彼に説明する。舞台は天に移り、ユピテルがアエネアスの神格化を認め、ユノを含めたほかの神々もこれを承認する。そこでウェヌスはアエネアスの魂を星々の中に運び入れ、彼が神となるところで詩は終わる。[8]

2. 『アエネイス』との接続

2－1. 接続（1）――冒頭部から

では、*Supplementum* が『アエネイス』とどのように接続されているのか、本文から検討していく。本作の冒頭は、以下のような詩行から始まる。

> Turnus ut extremo devictus Marte profudit
> effugientem animam medioque sub agmine victor
> magnanimus stetit Aeneas, Mavortius heros,
> トゥルヌスが打ち負かされて最後のマルス（戦闘）において逃れる命をこぼし、戦列の下に勝者として、マルス（ローマ）の英雄たる度量大きなアエネアスが立ったとき、
>
> （*Supplementum*. 1-3.）

この冒頭は、先述した通り、時系列的には『アエネイス』第 12 巻の直後にあたる。ヴェージョは、トゥルヌスをマルス（戦闘）における敗者 devictus Marte、アエネアスを勝者 victor かつマルス（ローマ）の英雄 Mavortius heros と描写し、Mars という言葉を用いて両者を規定し、戦いの結果を改めて提示することから詩を始める。アエネアスがトゥルヌスの胸を剣で刺し、トゥルヌスの魂が冥界に去る『アエネイス』の最終場面から続くには妥当に思われる。また、この描写は第 12 巻のトゥルヌスが自身の敗北とアエネアスの勝利を認めた最後の言葉を想起させる。[9)] 続いて、指導者が倒されたことで降参するトゥルヌスの配下たちの様子が比喩を用いて描写されるが、この比喩は『アエネイス』第 4 巻における比喩と同じモチーフが使われている。

> ...ceu frondibus ingens

silva solet lapsis boreali impulsa tumultu.
それは、巨大な森が北からの嵐によって葉を落とし打ち倒されるのが常であるのとちょうど同じである。

（*Supplementum*. 6-7.）

Ac, velut annoso validam cum robore quercum
Alpini Boreae nunc hinc nunc flatibus illinc
eruere inter se certant; it stridor, et altae
consternunt terram concusso stipite frondes;
ipsa haeret scopulis, et, quantum vertice ad auras
aetherias, tantum radice in Tartara tendit:
そして、それはあたかも、古い幹を持つたくましいオークの木をアルプス山脈の北風があるときはこちらから、またあるときはあちらからの風によって互いに掘り返そうと争っているようだ。ヒューヒュー鳴る風が通り、高くの葉が幹を揺り動かされて大地へ振りかかる。だが幹そのものは岩場にくっついており、そして、枝先において天上の空へ伸びるのと同じほどに、根において冥界へ伸びている。

（『アエネイス』第4巻441-446行）

『アエネイス』の比喩では、ディドの妹アンナの説得に心動かない様子のアエネアスが、北風によって葉は落ちるものの、しっかりと揺らがない幹に例えられる。一方、*Supplementum* でラテン人たちを例えた比喩では森もろとも倒れており、運命（＝ユピテルの意向）に従い続けたアエネアスと、その運命に逆らう側であったトゥルヌスの配下たちの結末が対照的に表現されている。

Supplementum では、さらに比喩が続き、トゥルヌスとアエネアスの一騎打ちの後のトゥルヌス軍の降伏する様子が雄牛の戦いの比喩で描写される。こちらは、12巻における雄牛の比喩と明らかな対応が見られる。

sicut acerba duo quando in ceretamina tauri
concurrant largo miscentes sanguine pugnam
cuique suum pecus inclinat, sin cesserit uni
palma duci, mox quae victo pecora ante favebant
nunc sese imperio subdunt victoris et ultro,
quamquam animum dolor altus habet, parere fatentur
それはあたかも、二頭の雄牛が厳しい戦いで衝突し、たっぷりの血で争いを混ぜているが、そのために自身の（群れの）家畜が傾いた時、もし勝利が一方の（群れの）長に与えられるならば、やがて、以前は打ち負かされた方を支持していた家畜の群れは、今では自信を勝者の支配の下に置いて、反対の立場になっている。深い悲嘆が心にあるとはいえ、屈服することを認めている。

（*Supplementum*. 13-18.）

Ac velut ingenti Sila summove Taburno
cum duo conversis inimica in proelia tauri
frontibus incurrunt; pavidi cessere magistri,
stat pecus omne metu mutum mussantque iuvencae,
quis nemori imperitet, quem tota armenta sequantur;
illi inter sese multa vi volnera miscent
cornuaque obnixi infigunt et sanguine largo
colla armosque lavant; gemitu nemus omne remugit:
それは、巨大なシーラ山かあるいはタブルヌスの頂上で、二頭の雄牛が敵対的な戦いへ額を向けてぶつかっていくときのようだ。飼い主は怯えて後退し、家畜の群れはみな恐れで黙って動かないでいる。そして、若い雌牛たちは誰が森を支配するのか、すべての家畜たちが誰に従うことになるのかと黙っている。その雄牛たちは互いに大きな力で傷を負わせ合い、角を押し付けて突っ込んでいく。そしてたっぷりの血で首と肩部

をぬらす。うめきで森全体が反響する。

（『アエネイス』第12巻715-722行）

Supplementum そのものがそうであるように、ヴェージョはウェルギリウスの描いた二頭の雄牛（すなわちアエネアスとトゥルヌス）の一騎打ちと、それを見守る者たちという比喩中の流れを引き継いで、その続きを描写していると言えるだろう。12巻には、上に挙げた部分の他に、トゥルヌスを雄牛に例える箇所がある。[10] ここでは戦いに逸るトゥルヌスが戦いを始めようと唸り声を上げ角を振り回す牛に例えられる。また、争い合う雄牛たちのイメージは同じく『農耕詩』にも表れており、[11] ウェルギリウスの作品内においても連続性の見られる比喩である。

このようにヴェージョは、冒頭で、アエネアスが勝者でありトゥルヌスが敗者であるという戦いの結末を直前のトゥルヌスの言葉を暗示しつつ明確に示し、続けてウェルギリウスの作品と連続性のある比喩を用いることで、*Supplementum* を『アエネイス』の続きとしてスムーズに導入している。

2－2. 接続（2）――予言から

Supplementum で起こる内容は、しばしば『アエネイス』内で既に予示されている。その最たる例として、第1巻と第12巻における神々の会話が挙げられる。

第1巻では、ユピテルは定められた運命を疑うウェヌスに対し、自分の意向を示す。すなわち、ラウィニウムの建設やアエネアスが天の星々の間へ運ばれることを語る。[12] 第12巻では、アエネアスとトゥルヌスの一騎打ちを見つめるユノへ、ユピテルがアエネアスが天の高みへ昇り、神となることを念押しする。[13]

未来を予示する発言をするのは神々だけではない。人間もまたその後の展開をほのめかすような言葉を残す。

例えば、第二巻においてクレウサ[14] は、ヘスペリア（イタリア）でアエネアスが豊かな国土、王権、そしてラウィニア[15] という名前は出さないものの、王家の妻を得るだろうと語る。[16]

以上のように『アエネイス』では様々な箇所で『アエネイス』より先の未来について言及している。

上に列挙したような内容は*Supplementum*の後半部に合致する。

例えば、アエネアスが土地に線を引いて都を建設する様子や、[17] ウェヌスに連れられてアエネアスの魂が天へ運ばれる様子が描かれる。[18] またこれらの描写の間に差し挟まれるウェヌスとユピテルの会話は、『アエネイス』第一巻において語られた運命を想起させる。アエネアスがイタリアを征服した後神格化されるという展開そのものはオウィディウス『変身物語』などにも見られるように、[19] ヴェージョ独自のものではなく、既に確立されたものであるが、ヴェージョがそれを描写するにあたって、『アエネイス』における予言を意識していることが見て取れる。

また、第 1 巻においてアエネアスの発した予言も *Supplementum* において実現される。

> forsan et haec olim meminisse iuvabit.
> Per varios casus, per tot discrimina rerum
> tendimus in Latium; sedes ubi fata quietas
> ostendunt; illic fas regna resurgere Troiae.

> きっといつかこのことすら思い出すことが喜ばしくなるだろう。様々な不運やこれほど多くの事態の危機を通って、私たちはラティウムへ向かっている。そこで運命は平穏な住処を差し出している。そこでトロイアの王国を再興するのが運命だ。
>
> （『アエネイス』第 1 巻 203-206 行）

上はカルタゴの漂着した仲間たちに対してアエネアスが行った演説である。ここでアエネアスは自分たちが現在置かれている苦境も、将来には思い出すに喜ばしいものになると述べている。この言葉を示唆する詩行が *Supplementum* には見られる。

> ...gaudia longis
> tandem parta malis, et quae perferre molestum
> ante fuit, meminisse iuvat.
> 長い不幸からようやく生まれた喜びと、耐えることがかつては煩わしかったことどもを思い出すことが彼を喜ばせる。
>
> （*Supplementum*. 119-121.）

また、第6巻におけるアエネアスの父アンキセスの言葉もまた、予言的な性質を持つものである。彼はアエネアスに対して統治によって平和を獲得すること、および降伏した者は助命し、傲慢な者は打ち負かすようにと説く。[20] この指示は、明らかに戦争後のことを意識した物言いである。では、戦争後を描いたところの *Supplementum* ではアンキセスのこの言葉が反映されているのだろうか。

まず、アエネアスによる統治下の平和が実現されたことが語られる。[21] 次に、*Supplementum* の冒頭において、ルトゥリ人たちが降伏し、アエネアスが彼らを受け入れる姿は従う者に寛容を示すようにというアンキセスの指示に当てはまると言えるだろう。

では、トゥルヌスについてはどうであろうか。『アエネイス』第12巻においてトゥルヌスは直前にアエネアスの勝利と自身の敗北を表明しているにも関わらず殺害される。彼は「従う者」ではなく、「傲慢な者」であったのだろうか。

少なくとも *Supplementum* において、ヴェージョはトゥルヌスを「傲慢な者」として描いている。トゥルヌスの精神的欠陥（例えばdementia「無分別」

や inpatientia「我慢ならなさ」）がくりかえし批判され、superbam animam「傲慢な魂」[22] を失ったとされる。以上で見てきたように、*Supplementum* の内容はアンキセスの言葉ともある程度の関連が認められよう。

以上のように、ヴェージョは神々の会話のみならず、『アエネイス』における未来に関する種々の言及を意識した形で *Supplementum* を構成し、『アエネイス』の最終巻として13巻を作り上げている。

3. 『アエネイス』との矛盾

3－1. 矛盾（1）――冒頭部

2節において、ヴェージョが比喩を用いて『アエネイス』との接続を効果的に図っていることを確認したが、*Supplementum* でのアエネアスの様子は12巻のそれとは一変する。『アエネイス』の終結部において、アエネアスは激しい怒りに駆られた人物として描かれる。

Ille, oculis postquam saevi monimenta doloris
exuviasque hausit, furiis accensus et ira
terribilis, “Tune hinc spoliis indute meorum
eripiare mihi? Pallas te hoc volnere, Pallas
immolat et poenam scelerato ex sanguine sumit,”
hoc dicens ferrum adverso sub pectore condit
fervidus.

彼（アエネアス）は、残酷な悲しみを思い出させるものである戦利品を目にして、狂気にかきたてられ、怒りは恐るべきものになった。「お前は、私の仲間の戦利品を引きはがして身に着けている者よ、私に救われるのか。パラスがお前へこの傷を（与え）、パラスがお前を犠牲に捧げ、罪で汚れた血で罰を受けるのだ。」このように言って、（アエネアスは）

激情に燃え立って、剣を胸の下に向かって埋めた。

（『アエネイス』第12巻945-951行）

このように、アエネアスはパラスの剣帯を目にしたことで、狂気からくる突発的な怒りでトゥルヌスを殺害する。だが、*Supplementum* においてトゥルヌス殺害後の第一声を発するアエネアスは冷静で穏やかな人物として現れる。

Tunc Turnum super adsistens placido ore profatur
Aeneas “Quae tanta animo dementia creuit,
ut Teucros superum monitis, summique tonantis
imperio huc uectos, patereris, Daunia proles,
Italia et pactis nequicquam expellere tectis?
Disce Iouem reuereri et iussa facessere diuum.
Magnum etiam capit ira Iouem, memoresque malorum
sollicitat uindicta deos; en ultima tanti
meta furoris adest, quo contra iura fidemque
Iliacam rupto turbasti foedere gentem.
Ecce suprema dies, aliis exempla sub aeuum
uenturum missura; Iouem ne temnere frustra
fas sit, et indignos bellorum accendere motus.
…
Sed quae Pallantis fuerant ingentia baltei
pondera, transmittam Euandro, ut solacia caeso
haud leuia hoste ferat, Turnoque exsultet adempto.

そのとき、アネエアスはトゥルヌスの上に立って、穏やかな顔で言った。「いかなる無分別が心で大きくなったのか。神々の忠告と最高たる雷鳴を轟かせるユピテルの命令によってここにやって来たトロイア人た

ちを、ダウヌスの子よ、隠された協定でもってイタリアから追い出すことを許容するほどの無分別が。ユピテルを畏敬すること、神々の命令を実行することを学ぶがよい。怒りは偉大なるユピテルさえ捕らえ、悪事を覚えている神々を復讐は激しく揺さぶる。見よ、法と信義に反してイーリウムの民族を同盟を破って揺り動かしたところのこれほどの狂気の最後の終局がある。見よ、最後の日は他の者たちにとっての警告を来たるべき世代の下へ送るはずだ。いたずらにユピテルを見下すことと、戦争にふさわしくない激情に燃え立つことは正当であるはずがないと。（中略）だがパラスのものであった剣帯の巨大な重みは、私がエウアンドルスに渡そう。敵を殺したゆえに決して軽くはない慰めをもたらし、彼はトゥルヌスが取り除かれて喜ぶはずだから。

（*Supplementum.* 23-43.）

ヴェージョの描くアエネアスは、穏やかな顔つき placido ore で第一声を発する。直前の時間軸である第十二巻におけるアエネアスとは異なる印象を受ける姿である。

アエネアスの言葉は、トゥルヌスの無分別 dementia を非難することから始まり、神々に逆らったことが話題の中心である。トゥルヌスを殺害に至る直接的な理由であったパラスの剣帯に関しては、後半で触れるものの、それが自身に喚起した怒りに関しては触れないままである。それどころか、剣帯はエウアンドルスの喜びという怒りとは反対の感情に紐づけられる。

ここで、ヴェージョはパラスの剣帯とエウアンドルスとの約束という『アエネイス』から続く話題を出しながらも、巧妙にその中身をすり替えている。アエネアスの怒りは無かったことにされ、トゥルヌスを殺した理由は突発的な怒りの感情ではなく、神々の意向に逆らったことに変わっている。トゥルヌスを非難しているとはいえアエネアスの言葉は、トゥルヌスへ怒りを感じていたとは思われないほど理性的である。

この変化を時間経過や殺害の実行によりアエネアスの怒りが緩和された、

と説明することも可能だろう。実際アエネアスが話し始めるのは 24 行目からであり、トゥルヌス殺害から空間的な間があるのは事実である。だが、アエネアスの怒りが単に時間経過で自然に消えたにすぎず、ヴェージョがその過程を省き説明しなかったわけではなく、一定の意図を持ってこのような描写を行ったと考えることも可能である。

アエネアスの感情の動きに関する先行研究は、Putnam が詳しい。Putnam は *Supplementum* の冒頭部のアエネアスの描写（「度量大きなアエネアスが立った」magnanimus stetit Aeneas[23]）について、「残酷な」acer を「度量大きな」magnanimus に置き換えることでアエネアスの性質を変化させているという。[24] Putnam によると、獰猛さは寛大さへ、敵対的な力は高潔さへ変化し、英雄としてのアエネアスの典型的な特徴として現れてくる。そうすることで、ヴェージョはアエネアスの「獰猛な哀しみ」や、「狂気に駆り立てられ、恐るべき怒り」を帯びた姿や、殺害後の「激情に燃え立つ」姿を思い出させるような描写[25] を省いていると主張する。[26]

さらに、Putnam はアエネアスがトゥルヌスに対して語り掛ける態度について、パラス殺害後のトゥルヌスと関連させる。

> Tunc Turnum super adsistens placido ore profatur
> Aeneas:
> その時、トゥルヌスの上に立って穏やかな顔でアエネアスは言った。
>
> （*Supplementum*. 23-24.）

> Quem Turnus super adsistens,
> ...inquit
> 彼（パラス）の上に立ってトゥルヌスは言った。
>
> （『アエネイス』第 10 巻 490-491 行[27]）

ヴェージョがウェルギリウスの詩行に placido ore profatur と肉付けする

ことで殺害後のアエネアスの穏やかで傲慢でない様子を描写しているとPutnamは説明する。『アエネイス』十巻でパラスを殺害し、剣帯をはぎ取るトゥルヌスの姿は、*Supplementum* においてはトゥルヌスの死体から剣帯をはぎ取るアエネアスに置き換わるが、トゥルヌスが戦利品を喜ぶのに対し、アエネアスは剣帯をはぎ取ることの意味をエウアンドルスへの慰めと意味づける。このように、アエネアスの怒りや攻撃性の不在の描写は『アエネイス』の描写と密接に関連づいたものであり、単に時間経過でアエネアスの怒りが冷めたとするのは不十分であろう。

時間経過で怒りが冷めたとするのがヴェージョの意図でないならば、*Supplementum* を『アエネイス』十三巻として見たとき、やはりアエネアスの感情に連続性は無いように思われる。

アエネアスの怒りは所在は説明されず、怒りの感情は無いものとして扱われている。だが、怒りや狂気という要素そのものが全く無くなったというわけではなく、誰かに転嫁された状態で語られている。怒りが捉えるのはアエネアスではなくユピテルであり、復讐が心を揺さぶる対象もまた、アエネアスではなく神々である。つまりアエネアスは神々の命令に従っているだけであり、トゥルヌスはその命令を阻んだゆえに殺されたのだという論理で、ここで殺害行為は正当化されている。狂気もまたそれによって「法と信義に反してイーリウムの民族を同盟を破って揺り動かした」ものと規定されており、トゥルヌスの側の属性として処理されている。さらに、「激情に燃え立つこと」に至っては、「戦争にふさわしくない」という注釈付きではあるが、正当ではないと告げられる。アエネアスも十二巻において狂気によって同じように激情にかられたことは、最後まで触れられない。

3－2. 矛盾（2）——予言から

予示的な言葉と *Supplementum* の内容の対応関係もまた、齟齬が見られる部分がある。

ディドもまた、アエネアスの未来に言及する一人であるが、彼女が自殺前

に残した言葉には大きく分けて作中で実現する部分と、作中で描かれない部分が入り混じっている。[28] 作中で描かれる部分ではディドの残した言葉通り、アエネアスは「勇猛な民族との戦争に悩まされ」、「援軍を乞い、仲間の無残な死を見る」。一方、作中で描かれなかった部分、すなわち未来について言及したディドの呪いの言葉には実現する部分と実現しない部分がある。

nec, cum se sub leges pacis iniquae
tradiderit, regno aut optata luce fruatur,
sed cadat ante diem, mediaque inhumatus harena.
また、自身を不利な講和の法の下に明け渡し、あるいは王権も望まれた王権も享受しませんように。そして時ならず倒れ、砂浜の中央で埋葬されずありますように。

（『アエネイス』第4巻618-620行）

ディドはこのように戦争の後のアエネアスを呪う。アエネアスの死は『アエネイス』内で描かれず、*Supplementum* において言及されるアエネアスの死と神格化に関しても調和しないが、彼は将来の新しい国ではトロイア人の名と風俗を失い、[29] 新国家の軍事権もラティヌスに委ねることになる。[30] このように、小川はディドの呪詛の一部は未来に実現するものであることを指摘する。[31]

tertia dum Latio regnantem viderit aestas,
ternaque transierint Rutulis hiberna subactis.
ラティウムを支配する者を見るまでに、三度の夏が、そしてルトゥリ人を征服する際三度冬の陣営が過ぎるだろう。

（『アエネイス』第1巻265-266行）

また、第一巻のユピテルの予言によれば、アエネアスが政権を握るのは三

年のみであり、その三年間もルトゥリ人の制圧に費やされるという。

しかし、*Supplementum*の展開はこれと矛盾したものである。

第一に、ルトゥリ人たちはトゥルヌスが殺された冒頭時点で降伏し、講和を求める。[32] 三年とかからず、ラティヌスの治世の時点で平和は実現され、さらに、女神ウェヌスはアエネアスの治世での平和を予言し、[33] その平和も*Supplementum*中に実現する。

> Nec tua te promissa, pater, sententia fallit;
> Namque omnes gaudere sacra tres pace per annos
> Uiderunt Italae nullo discrimine partes;
> あなた（筆者注：ユピテル）の約束した意向は、父よ、私を裏切らなかった。というのも、三年の間聖なる平和を皆がいかなる危機も無く喜ぶのをイタリア地域は見たからだ。
>
> （*Supplementum*. 599-601.）

『アエネイス』におけるユピテルの言葉とは食い違う展開である。ユピテルの言葉はそのまま運命 fata であり、アエネアスはこの運命に基づいて行動し、ユノはこの運命に怒り抵抗してきた。このように『アエネイス』の根幹をなし、これまでのアエネアスの行動の指針そのものであったユピテルの言葉と矛盾する*Supplementum*の展開は、『アエネイス』と接続を揺らがせうるものである。

4. ヴェージョの接続方法の検討

これまで、ヴェージョが*Supplementum*を『アエネイス』の続巻として書くにあたってどのような接続がなされているか、またその接続にはどのような不自然な点であるかを指摘してきた。本項では、不自然な点にはどのようなヴェージョの意図があったのかを検討する。

改めて *Supplementum* と『アエネイス』の接続にある問題点をここで並べる。一点目は、アエネアスの感情に連続性が見られないことである。『アエネイス』においてトゥルヌスへの激しい怒りに支配されていたアエネアスは、*Supplementum* における直後の場面では理由や過程を一切描かれないままに穏やかで冷静な人物として現れる。二点目に、『アエネイス』においてアエネアスの行動の指針であったユピテルの言葉が実現されていない点である。ユピテルはラティウムを支配するまで三年の間戦争が続くと述べているが、*Supplementum* ではすぐに講和が結ばれ、平和が訪れる。

それでは、なぜヴェージョがこのような改変を行ったのであろうか。

二点に共通するのはアエネアスと怒りや狂気といった感情に結び付けることに対する忌避である。十二巻で現れたアエネアスの怒りは狂気から激化したものであるが、*Supplementum* では一貫して狂気はアエネアスではなくトゥルヌスのものとして語られる上、その狂気こそが戦争を引き起こすものとして作中では説明される。[34] アエネアスは狂気に駆り立てられて戦いに臨んだと主張し、[35] また戦争と狂気を並置して語る。[36] ドランケスは、トゥルヌスの狂気が戦争の争乱のすべてを運んできたと言う。[37] このように狂気が戦争を運んでくるというイメージは *Supplementum* の中で何度か現れる。一方でアエネアスは戦闘を望まない、平和主義的な人物として描かれる。ユピテルの語る運命 fata の通り、三年間続く戦争をヴェージョが描いたとすれば、アエネアスを戦争やそこにある狂気と紐づけてしまうことになる。*Supplementum* において平和が描かれたのは、アエネアスと怒りや狂気を結び付けないためであろう。

では、このような怒りや狂気と結びつかないアエネアス像をヴェージョが求めたのはなぜか。ここで彼の後年の作である *De Educatione Liberorum*『子供たちの教育と彼らの明らかな道徳について』）を参照する。これは、1444 年に発行された 6 巻から構成される教育に関する論文であるが、その中で、彼はウェルギリウスがアエネアスをいかに描いたかについて言及する。

> Nam cum Virgilius sub Aeneae persona virum omni virtute praeditum, atque ipsum nunc in adversis, nunc in prosperis casibus, demonstrare voluerit
>
> というのも、ウェルギリウスがアエネアスの人格のもとに、あるときは逆境に、またあるときは順境にあっても、全ての徳を備えている男を示すことを意図した
>
> （*De Educatione Liberorum.* 2. 18.）

ヴェージョはアエネアスが一種の道徳規範のような存在として描かれたと考えていた。実際彼は *Supplementum* においてアエネアスには一切の過失を負わせず、トゥルヌスにすべての過失を負わせている。アエネアスの人格的な問題は一切認められず、最後にはその完成された徳によって神格化にふさわしいとされる。Kallendorf によると、Richard Thomas はこのようなヴェージョの姿勢を、アエネアスを祖国に対する裏切り者と捉えるような悲観的な読み方に対する対抗であると考える。[38] ルネサンス期において、ウェルギリウスは技法と精神的内容の両面から評価されていた。[39] 特に精神的内容を評価することにおいて、アエネアスがその例に挙げられることが多く、アエネアスは古代ローマの理想的英雄と考えられていた。[40] このようにアエネアスは理想的・模範的人物像として受け止められることが主流であったが、一方、彼の欠点も指摘された。例えば、Kallendorf は Francesco Filelfo が、*De morali disciplina* においてアエネアスのトゥルヌスに対する非情さを非難していることに触れている。[41]

このように、アエネアスを一方では優れ、一方では非難されるべき性質を持つ人物として多面的に捉える者もいた中で、ヴェージョはアエネアスを全面的に肯定する姿勢を取っている。その評価が、*Supplementum* において描かれるアエネアスの姿にも反映されていると考えられるだろう。

結論

ヴェージョは、*Supplementum* を第十三巻として効果的に『アエネイス』に接続するために、様々な工夫を行っている。ひとつは、冒頭に『アエネイス』と関連のある比喩を連続して持ち込むことである。連続する北風に吹かれる木の比喩と雄牛の比喩は『アエネイス』でも同じモチーフの比喩が用いられている。同じモチーフからウェルギリウスの詩行を想起させることで、ヴェージョは自身の叙事詩を自然に『アエネイス』の続巻として接続している。さらに、*Supplementum* は修辞的な側面のみならず、内容に関しても『アエネイス』を意識したつくりを取っている。ヴェージョは『アエネイス』内における神々の会話や、登場人物たちの未来に関する種々の言及を示唆する形で *Supplementum* を構成し、『アエネイス』の最終巻としての十三巻を作り上げている。

一方で、矛盾点も存在する。アエネアスの性質から『アエネイス』終局における怒りや狂気のは取り除かれている。また、ユピテルの語った言葉が実現しないという点で、『アエネイス』と食い違いが発生している。これらからアエネアスに怒りと狂気を結び付けないヴェージョの傾向が見て取れるが、これはヴェージョのアエネアスに対する全面的な肯定的評価の現れではないかと考えられる。

［註］

1）　この時代において古代の作品に対する補遺が作られること自体はめずらしいことではなかった。例えば、1639年にはThomas Mayがルカヌスの未完の作である *De bello civili* に7巻からなる補遺を作成している。（Knight and Stefan（2015）, p. 68）

2）　小川（2004）p. 8

3）　*De Educatione Liberorum*. 2. 18

4）　Putnam(2004) p. xxiii

5） 本論文で使用するテキストについて、ウェルギリウスの作品においては Mynors、ヴェージョの *Supplementum* については Putnam、*De Educatione Liberorum* については Walburg のものを利用する。以降引用は全てラテン語であり、和訳は筆者による。

6） 小川（2004）pp. 409-412

7） パラスはアエネアスたちが同盟を組んだエウアンドルスの息子である。アエネアスはパラスの死に深い悲しみを覚えており（*Aen*. 11. 40-58）、また父エウアンドルスから彼の仇を取ることを望まれていた（*Aen*. 11. 151-180）。

8） なおヴェージョは、アエネアスの神格化をオウィディウス『変身物語』第14巻573～608行から借用して書いている。

9） uicisti et uictum tendere palmas / Ausonii uidere; (*Aen.* 12. 936-937)

10） *Aen.* 12. 102-106

11） *Georg*. 3. 215-36 には、雌牛を取り合い争う二頭の牛についての記述があり、『アエネイス』における雄牛の比喩との関連が見られる。

12） *Aen.* 1. 257-296

13） *Aen.* 12. 793-795

14） クレウサはトロイア人でアエネアスの妻であったが、第二巻のトロイア落城の混乱の中で命を落とし、霊の姿でアエネアスの前に現れる。

15） ラウィニアはラウレントゥムの王ラティヌスの娘。彼女をアエネアスに嫁がせることを巡って『アエネイス』ではイタリア人とトロイア人の間で戦争が起こった。

16） *Aen.* 2. 781-784

17） *Supplementum*. 537-539

18） *Supplementum*. 623-630

19） 註 8）を参照。また Putnam は、『変身物語』第 15 巻 840 ～ 848 行で描かれるカエサルの神格化とその実行者としてのウェヌスとの関連を指摘している。（Putnam（2004）pp. xv-xvi）

20） *Aen.* 6. 851-853

21） Et iam compositos felici in pace regebat / Dardanidas;「そしていまや、彼は集まったダルダニア人たちを幸福な平和の中で統治していた。」（*Supplementum.* 586-587）

22） *Supplementum.* 205-206

23） *Supplementum.* 3

24） この主張において acer をどこに依拠しているのか Putnam は明示していないが、stetit acer in armis Aeneas（*Aen,* XII. 938-939）と考えてほぼ間違いないであろう。

25） *Aen.* 12. 945-47, 951

26） Putnam（2004）pp. xix-xx

27）第10巻490行は韻律が不完全な事で知られている行である。
28）「ディドの言葉はその一部は『アエネイス』中に実現するものとして語られる。ラティウムに上陸したアエネアス一行は戦場で多くの仲間や同盟者の命を失う、ユノの要求に従ってトロイア人の名と言葉と風俗を失う、新国家の軍事権は誓約によってラティヌスのものになる、などという形で作中で実現するものの、アエネアスの遺体が埋葬されないという点は歴史記述においてもその後の神話においても矛盾する。」（小川（2004）pp. 520-521）
29）*Aen.* 12. 821-828
30）*Aen.* 12. 192-193
31）小川（2004）pp. 520-521
32）*Supplementum*. 21-22
33）*Supplementum*. 577-581
34）この点においては『アエネイス』とも共通する部分があると思われる。例えば、第1巻において、戦争と神格化された「狂気」のつながりを読み取れる記述が見られる。（*Aen.* 1. 293-296）
35）*Supplementum*. 46-48
36）*Supplementum*. 86-87
37）*Supplementum*. 339-342
38）Kallendorf (1999) p. 398
39）小川（2004）p. 8
40）Kallendorf (1999) p. 401
41）Kallendorf (1999) pp. 396-397

［参考文献］

Brinton, A.C. (1978), *Maphaeus Vegius and his thirteenth book of the Aeneid*, (New York: Garland Publishing).

Kallendorf, C. (1999), ‘Historicizing the “Harvard School”: Pessimistic Readings of the Aeneid in Italian Renaissance Scholarship’, *Harvard Studies in Classical Philology*, 99, 391-403

Knight, S. and Tilg, S. (ed.), (2015), *The Oxford Handbook of Neo-Latin* (Oxford: Oxforf University Press).

Mynors, R. A. B. (ed.), (1969), *P. Vergili Maronis OPERA* (Oxford Classical Texts; Oxford: Oxford University Press).

Putnam, M.C.J. and Hankins, J. (ed. and trans.), *Maffeo Vegio Short Epics* (The I Tatti Renaissance Library; Cambridge and Mass.: Harvard University Press).

Walburg, M. F. (ed.), (1933), *Maphei Vegii Laudensis De Educatione Liberorum Et Eorum*

Claris Moribus Libri Six A Critical Text of Books I-III (Washington: The Catholic University of America).
岡道男・高橋宏幸（訳）、ウェルギリウス『アエネーイス』西洋古典叢書、2001
小川正廣『ウェルギリウス研究　ローマ詩人の創造』京都大学学術出版会、1994
小川正廣（訳）、ウェルギリウス『牧歌／農耕詩』西洋古典叢書、2004

（大学院博士前期課程学生）

SUMMARY

The connection between Maffeo Vegio's "*Supplementum*" to the *Aeneid*

Minami Ogawa

The *Supplementum* is a Latin epic written by Maffeo Vegio, an Italian poet, in 1428. It has 630 lines, and is written as a sequel to Vergil's the *Aeneid* , Roman's national poem. Thus, the *Supplementum* is also called "the 13th book of the *Aeneid*".

The *Supplementum* begins from the end of the 12th book of the *Aeneid*. At that point, Aeneas had killed Turnus, the leader of the hostile army. The first half of the *Supplementum* primarily describes the peace between the Troian and the Rutulian, and the funeral; the other half of the epic describes the marriage of Aeneas with Lavinia and his apotheosis.

Vergil's the *Aeneid* has had a significant influence on literature down through the ages. In the era Vegio wrote the poem, the *Aeneid* was highly appreciated both for its moral value and rhetorical effect, which was treated as an exemplary literature. Vegio also recognized Vergil's excellence in his thesis. In such an era, the *Supplementum* became popular and was printed in 1471 in Adam de Ambergau' edition of the *Aeneid.* Subsequently, it had started to be attached to several other editions.

This paper analyzes the ways in which the *Supplementum* connects itself to the *Aeneid,* , and the problems generated by that connection owing to how Vegio understood the *Aeneid* and wrote the *Supplementum.*

By using the same motif as Vergil in the similes and implying the prediction in the *Aeneid*, Vegio made the connection between his *Supplementum* and Vergil's *Aeneid* strong. However, there are two problems in the connection. First, Aeneas' emotion is inconsistent. In the 12th book of the *Aeneid*, he was depicted as an angry man, but in the *Supplementum* he was described as the calm man. Second, Jupiter's prediction was not accomplished in the *Supplementum*. Since, Jupiter is the Supreme God, therefore, generally his prediction cannot be ignored. Then, why did these problems arise in Vegio's poem?

Vegio tended to separate Aeneas from the emotions of anger and fury. According to *De Educatione Liberorum,* he thought that Vergil described Aeneas as the man endowed with every virtue. Thus, Vegio might want to remove Aeneas from such emotion.